

マリンバ ミニコンサート

ぷろぐらむ

ロンドンデリーの歌／リムスキーコルサコフの「熊蜂の飛行」／あの夏へ（千と千尋の神隠しより） 他

ぷろふぃーる／福島直美

秩父市出身。武蔵野音楽大学器楽学部打楽器科マリンバ専攻を卒業。これまでに新井富貴子、高橋美智子の各氏に師事。小学校や特別支援学校で勤務し、音楽教育にた

ずさわる。現在は老人ホーム、小学校などで聴く人も演奏者も楽しめるマリンバアンサンブルの演奏会を開催するかたわら、地元で後進の指導にあたっている。

編集後記2

◇（表面から続きます）AIの回答は、もつともらしい事がきれいに整理されているから、どこに間違いがあるのかわからない。それにネットで広まっている事を寺の住職が書いたり言ったりしても価値がないじゃないですか。そんなこと皆さんの方がよくご存じのはず。将棋の藤井聡太名人は、AIの想像を超えた一手を打つでしょう。天才にはおよびはしないけれど、人工知能には思いつかない発想をしたい。

◇AIはネットにある膨大なデータを瞬時に整理してくれる（らしい）。でも、コンピューターが読めない資料、つまりデータになっていない資料は不得意なはず。おはぎでいえば、どうもAIは金田一春彦先生の名著『ことばの歳時記』（新潮文庫）を知らないようだ（不勉強者メー）。これは昭和四〇年、一年間にわたり新聞に連載された三六五の話題を一冊にまとめた本です。その三月二十一日に「おはぎ」と題した四五〇字ほどの短文があり、次のように教えてくれます。

「福里栄三氏に従えば、モチ米で作ったものがボタモチ、ウルチで作ったものがオハギだそうであり、桜井志江氏によると、モチで作ったものがボタモチで、モチ米で作ったものがオハギだという」。

牡丹説、萩説のほかにも有力な語源があ

るし、「ぼたもち」と「おはぎ」は同じ食べ物ではないというのだ。金田一先生はこの後、もち米を半分つぶしたハンゴロシから愉快な逸話を紹介しているのですが、紙面の都合で引用できないのが残念。

◇引用とえば、『ことばの歳時記』はきちんとモチ米説、うるち説、モチ説の出所を明記しているでしょう。よう知らんけど（これは、関西人のきまり文句）、AIは話題の出所を明記しないような気がします。人工知能を「究極のカンニングマシン」と評したのは芥川賞作家であり妙心寺派の住職である玄侑宗久師ですが、盗み見た話題なので、公にできないのでしょうか。世の中そろってAIエイアイというから、へそまがりに悪口を書きました。

◇あんこといえば、お盆のお便りで、銀座木村屋の名物、桜漬けがおへそになったあんぱんの誕生には山岡鉄舟がかかわっていると書きました。鉄舟は毎日深夜まで坐禅をし、何人もの老師方の指導をうけて、大悟した禅者でもあったのを書き忘れしました。大悟って何？ 右頁を読んでみて！

◇鉄舟は禅の応援団でしたから、東京谷中に全生庵というお寺を建てています。全生庵は現代の政財界の人びとが坐禅をする寺です。あるいは近くの小川町に伝わる「忠七めし」も鉄舟の発案だとか。そう知ると身近な存在になってきませんか。（住職記）



境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和6年9月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示版ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。

九月のことば

「さとり」って何、ってきかれると、ちょっとむずかしいけれど。自分や世界がどんなものであるかが、すっきりとわかって、もう悩まない……、そんなじょうたいかなあ。 山本勉著『完本仏像のひみつ』

若くはない私には縁遠いけれど、「元カノ」「元カレ」という言葉があるそう。元カレ「元カレ」の略らしいけれど、「彼」は万葉集にもでてくる古い言葉です。

明治時代以後、男性をさす西欧語の訳語として使われて身近になったけれど、それ以前は女性も「彼」だし、遠く離れた物や場所、方角、時を表す代名詞であったとか。例をあげれば、彼岸です。

彼岸は元カレ元カノがいる岸ではない。どこかにある理想の岸です。仏教にとって理想の彼岸は、「悟り（さとり）」です。「悟る」という困難な宗教体験を、理解するのが困難な文字をならべて説明してくれる文章はいっぱいあるでしょう。でも、簡単に端的にのべたものとなると少ないのでは。

冒頭に東京国立博物館に勤務した美術史家の山本勉著『完本仏像のひみつ』（朝日出版社）から「悟り」の定義を引用しました。完本と題しているから、完結する前があるわけです。平成十八年に初版が



出版され、その二年後に「続・仏像のひみつ」が出版されて、令和になって『完本・仏像のひみつ』が出ています。完本の帯には、（累計十三万部。新たな「ひみつ」を加えた完全版）とあります。最初と続の二冊は自分でお金を出して買いました。でも「完本」はいいただきました。イラストを担当した川口澄子さんが贈ってくださいました。川口さんは拙書『おうちで禅』と『またまた・おうちで禅』のイラスト担当でもあるのです。

そんな内輪の話はこのくらいにして、「すっきりとわかって、もう悩まない」ためにいろいろと行う特別な一週間が春と秋の彼岸です。

以前、金沢に住む、浄土真宗の上人（しょうにん）が「最近北陸でも東京の影響で彼岸に墓参りようになってしまった。彼岸はお寺へ行って聞法（もん

ぼう）仏教の教えを聞き学ぶこと）するもんだ」と嘆いていた文章を読んだことがあります。彼岸に墓参りするだけではちと寂しい。お悟りの岸へ近づくようにする一週間です。

さて、この文章を終えるに際して、一昨年の九月にもご紹介した俳句を、もう一度引用しておきましょうか。

泳ぎても泳ぎても此岸（しがん）かな

上田克彦